

## 第十八章 価値と富、それぞれの特質

アダム・スミスは、人が裕福か貧しいかは、生活必需品や暮らしの快適さや便利さ、さらに娯楽を、どの程度余裕をもって享受できるかによって決まると述べている。

価値は豊富さではなく、生産の困難さまたは容易さ、すなわち投入労働に依存し、富とは本質的に異なる。製造業で一〇〇万人が働いているならば価値の総量は常に同じだが、富は同じとは限らない。機械の発明や技能の向上、分業の洗練、新市場の開拓によってより有利な交換ができるようになれば、同じ労働から「必需・利便・娯楽」に当たる富を二倍、三倍に増やせても、価値は増えない。各財の価値は生産の困難さまたは容易さ、言い換えれば要した労働量に比例して上下するからである。例えば、一定の資本の下で靴下一、〇〇〇足を作っていたところ、機械の導入で同じ人数が二、〇〇〇足を作れるようになった、あるいは靴下一、〇〇〇足に加えて帽子五〇〇個も作れるようになったとしても、二、〇〇〇足の靴下、または靴下一、〇〇〇足と帽子五〇〇個の価値は、導入前の靴下一、〇〇〇足の価値と等しい。同じ労働の産出だからである。にもか

かわらず、財の総体価値は下がる。改良がなければ得られたはずの少量産出の価値と、改良で増えた産出の価値とが同額だとしても、改良前に生産され未消費の在庫が、新条件の下で生産された財の水準に合わせて単位当たりで値下がりするためである。したがって、財の量が増え、国富や暮らしの便益をもたらす手段が広がっても、価値の総額は小さくなる。生産が容易になるほど、過去に作られた一部の財の価値は下がるが、同じ要因が国富と将来の生産力を高める。経済学に見られる多くの誤りは、富と価値を同一視する取り違えと、価値の標準尺度に関する根拠の薄い観念に由来する。貨幣を標準とし、より多くの貨幣と交換できるほど国が豊かだとみなす説がある一方で、貨幣は交換の媒介にすぎず真の尺度は穀物だとする説や、購入可能な労働量で豊かさを測る説もある。だが、金や穀物や労働が、石炭や鉄、布や石鹼やろうそくといった労働者の必需品より標準として優れていると言える根拠はどこにあるのか。標準とされるものの自体が変動する以上、なぜ特定の財や全商品の集合が標準になり得るのか。穀物も金も、生産の難易によって他の財に対して一〇、二〇、三〇パーセントと変動し得る。なぜ常に他の財が動いたと言い、穀物が動いたとは言わないのか。不変なのは、常に同じ労苦で作れる財だけだが、そのような財は現実には存在しない。とはいえ、仮にそのような財を想

定して論じれば、従来の標準が不適切であることは示せる。しかも、仮に正しい価値尺度が見つかったとしても、それは富の尺度にはならない。富は価値に依存しないからである。個人の豊かさは、実際に手に入れられる必需品や贅沢品の豊富さで決まり、それらが貨幣や穀物や労働に対して高くても低くても、暮らしへの寄与は同じである。価値と富を混同すれば、希少になれば価値は上がるのだから財を減らせば富が増えるという誤った結論に至る。だが、アダム・スミスが言う通り富が必需と享楽から成るならば、量を減らして富が増えることはない。

希少な財や資源を持つ人が、それによって生活必需品や楽しみをより多く確保できるならば、その人の富は増え、いつそう裕福になるのは確かである。しかし、人々の富の源である社会の共通の蓄えは、個々が引き出した分だけ目減りするため、特別に恵まれた人が自分の取り分を増やせば増やすほど、他の人の取り分は比例して削られる。

ローダーデール卿は、水が乏しくなり、かつそれがある一人に独占的に所有されれば水に価値が生じ、その者の富は増え、富を各人の富の総和とみなすならば同じ理屈で社会全体の富も増えると言う。確かにその個人の富は増えるが、農家は穀物の一部を、靴職人は靴の一部を売り、誰もが、もともと無償だった水を得るためだけに自分の保有物

の一部を差し出さざるを得ず、この目的に充てざるを得ない財貨の分だけ人々は貧しくなり、水の所有者は彼らの損失にちょうど等しい利益を得る。社会全体が享受する水の量も財貨の総量も変わらず、変わるのは配分だけである。もつとも、ここでの前提は不足ではなく、むしろ独占である。もし本当に不足が生じれば、社会が享受しているものの一部を失うことになるため、国の富も各個人の富も実際に減少する。農家が必要または望ましい他の財と交換できる穀物は減り、農家自身も他の人々も、最も基本的な快適さの一つを享受することが制限される。変わるのは配分だけではなく、富そのものの実損が生じる。

生活の必需品や快適さをもたらすあらゆる財をまったく同量だけ保有している二国は、等しく豊かだ。ただし、それぞれの富の価値は、それらの財がどれほど容易に、あるいはどれほど困難に生産されたかという相対的な事情に左右される。たとえば、機械の改良によって追加の労働なしに靴下を一足ではなく二足作れるようになれば、布一ヤードと引き換えに差し出さなければならない靴下の数は二倍になる。布の製造にも同様の改良が及べば、靴下と布の交換比率は変わらないが、両者の価値は下落する。帽子や金など他の一般の財と交換するには、以前より二倍の量を差し出す必要があるからである。

この改良が金や他のすべての財の生産にまで及べば、交換比率は元の比率に戻る。国内で年間に生産される財の量は二倍となり、国の富も二倍になるが、富の価値そのものは増えない。

私はこれまでに何度も指摘してきたが、アダム・スミスは富について正確な記述を与えている。しかしその後、彼はこれを別様に説明し、「人は購入できる労働量に依じて富むか貧しいかが決まる」とも述べている。これは前者と本質的に異なり、確かに誤りである。たとえば、鉱山の生産性が上昇して金銀の生産が容易になり価値が下がる、あるいはビロードがより少ない労働で作られて価格が従来の半分になるとする。このとき、それらの財を購入する人々の富は増え、ある人は銀器を増やし、別の人はビロードを二倍買えるようになる。しかし、余分に得た銀器やビロードがあっても、彼らが雇える労働量は増えない。ビロードや銀器の交換価値が下がり、一日の労働を得るには、そうした形の富を相対的により多く差し出さねばならないからである。したがって、富は購入できる労働量では測れない。

これまで見てきた通り、国富を増やす方法は二通りある。生産的労働の維持に充てる所得の比重を高めれば、商品の数量もその総価値も増える。一方、労働量を増やさずに

同じ労働量をより生産的にすれば、商品の豊富さは増えるが、価値は増えない。

第一の場合、国は豊かになるだけでなく、保有する富の価値も高まる。儉約によって、贅沢や娯楽への支出を減らし、その節約分を再生産に充てることで、国は豊かになる。

第二の道では、贅沢や娯楽への支出を減らす必要も、生産的労働の投入を増やす必要も必ずしもなく、同じ労働でより多く生産される。その結果、富は増えても価値は増えない。富を増やす道は二つあり、第一の道では贅沢や娯楽の支出を削ることによる自由が避けられないのに対し、第二の道はそれを伴わず同等の効果が得られるため、後者を選ぶべきである。資本は将来の生産に充てられる国富の一部であり、富と同様に増やせる。追加された資本は、技能や機械の改良から生じる場合でも、収入のより多くを再生産に充てることで生じる場合でも、将来の富の生産に等しく有効である。富は常に生産された財の量に依存し、生産手段がどれほど容易に調達できたかとは無関係である。一定量の衣服と食料があれば、同じ人数を養い、雇用でき、達成される仕事量も同じである。それが一〇〇人の労働で生産されても二〇〇人の労働で生産されても変わらない。ただし、生産に二〇〇人を要したならば、その財の価値は二倍になる。

経済学者のセイは、著名な著作の第一章で富と価値を定義したが、その定義は妥当と

は言いがたい。要点はこうである。富は価値を備えたものだけで構成され、富の大きさはそれらの価値の総和で決まる。価値が等しい二つの対象は、等量の富である。二つの対象は、一般の合意によって互いに自由に交換されるとき、等しい価値をもつ。人々が対象に価値を認めるのはその用途によるのであり、人間のさまざまな欲求を満たす能力をセイは効用と呼ぶ。価値ある対象を生み出すことは富の創出に当たる。効用が価値の主要な基礎であり、価値の総体が富を形づくるからである。ただし無から対象を作ることはできず、物質の形を変えて効用を与えるにすぎない。したがって生産は物質の創造ではなく効用の創造であり、生産物はその効用がもたらす価値で測られる。対象の効用は、一般的な評価においては、それと引き換えに得られる他の財貨の量として示される。こうした社会的評価に基づく価値づけが、アダム・スミスの言う交換価値であり、テュルゴーの言う評価可能価値、要するに価値である。

ここまでがセイの主張である。しかし、彼は価値と富を説明する際に、本来区別すべき二つの概念、すなわちアダム・スミスのいう使用価値と交換価値を混同している。機械を改良し、同じ量の労働で靴下を一足ではなく二足作れるようになって、一足の効用は変わらない一方で交換価値は下がる。このとき、私が外套、靴、靴下、その他すべ

ての品物を以前とまったく同じ数量だけ持っているならば、有用なものの量もまったく同じで、富の尺度を効用とするならば豊かさも変わらない。それでも交換価値の総額は減少する。靴下の交換価値が半分になるからである。したがって、効用は交換価値の尺度にはならない。

セイに富とは何か、その本質は何かを問うと、彼は富とは価値あるものの所有にあると答える。では価値とは何かとさらに尋ねれば、彼はものの価値はそれが備える有用性の程度で決まるという。ではその有用性はどのように判断するのかと問えば、彼はそれらの価値によって判断するのだと答える。結局、価値の尺度は有用性であり、有用性の尺度は価値だという循環論法になる。

セイは、アダム・スミスの大著の長所と欠点を検討する中で、スミスが価値を生み出す力をもっぱら人間の労働に帰しているのは誤りだと指摘する。より正確な分析によれば、価値は、労働の作用、というよりは人間の勤労の作用が、自然の与える諸要因の作用および資本の作用と結びつくことに負っており、スミスがこの原理を理解していなかったため、富の生産における機械の影響についての正しい理論を確立できなかったと述べる。



アダム・スミスの見解に反して、セイは第四章で、太陽・空気・大気圧などの自然の諸力が商品に与える価値について述べる。これらは、ときには人間の労働に取って代わり、ときには人間と協働して生産にあたると述べる。

しかし、自然の力は商品の使用価値を高めても、セイの言う交換価値を商品に付け加えることはない。機械や自然科学の知識を用いて自然の力に人間の労働を肩代わりさせれば、その労働の交換価値はそれに応じて下がる。たとえば、一〇人が人力で製粉機を回していたところに、風力や水力の助けでこの一〇人の労働を省けるとわかれば、その製粉で得られる小麦粉の価値は、節約された労働量に比例して直ちに低下する。そして、彼らの維持に充てられている資本は少しも損なわれないので、その一〇人の労働を別の生産に振り向けられる分だけ、社会の富は増える。

セイは、スミス博士が自然力や機械の価値への寄与を見落とし、価値の起源をすべて労働に還元したと批判するが、これは妥当な非難ではない。スミスは自然力や機械の役割を軽視しておらず、それらが付け加える価値の性質を区別していた。自然力や機械は生産量を増やし、富を増やし、使用価値を高めるが、空気や熱、水の利用は無償であるため、交換価値は増えない。しかもセイ自身も第二書第一章で、効用が価値の基礎だと

しても、価値はそれを得るのに必要な労働量に依存すると述べている。このように理解された効用は、それを人の欲望の対象とし、需要を成立させる。欲するだけで得られるものは自然の富であり、空気や水、太陽光がその典型である。もしこのやり方で欲求の対象がすべて手に入るなら、人は無限に富み、何も欠くことはないだろう。しかし残念ながらそうではない。人にとって快適で好ましいものの大部分や、社会生活に不可欠なものの多くは、無償では与えられず、一定の労働の投入、一定の資本の使用、しばしば土地の使用によってのみ存在しうる。これらは無償享受の障害であり、そこから実際の生産費が生じる。というのも、私たちはこれら生産の諸要因の助力に対して対価を支払わねばならないからである。効用が産業・資本・土地によって与えられたとき、初めてそれは生産となり価値をもつ。需要は効用に根差すが、入手のための犠牲、すなわち価格がその広がり制約する。

「価値」と「富」の混同が招く混乱は、次の引用が最もはっきりと示している。セイの門弟は「社会の富は保有する価値の総和だと言う。ならば、たとえば靴下の生産が落ちて社会の価値の総和が減れば、富も減るのではないか」と問う。セイはこれに対し「それでも社会の富の総量は減らない。靴下が一足の代わりに二足つくられ、一足三フ

ランの靴下が二足あれば、一足六フランの靴下と同じ価値である。二足を一足三フランで売っても製造業者の利得は一足を六フランで売ったときと同じで、社会の所得は変わらない」と答える。ここまでは誤りではあるが一貫している。価値が富の尺度ならば、各商品の価値が以前と同額である限り、社会は同じだけ富んでいるはずである。ところが結論はこうである。「所得が同じまま生産物の価格が下がれば、社会は実際に豊かになる。絶対に不可能とは言えないが、もしすべての財が同時に同率で値下がりすれば、社会は消費対象をすべて半額で手に入れられ、所得を失わずに以前の二倍豊かになり、購入量も二倍にできる」。

前の箇所では、供給が潤沢になってあらゆる財の価値が二分の一に下がると、量が二倍になり総価値は同じだから、社会は同じだけ豊かだとする。これに対し後の箇所では、財の量が二倍に増え各財の価値が二分の一に下がって総価値が以前とまったく同じでも、社会は以前の二倍豊かだとする。前者は富を価値の総量で測り、後者は人が享受できる財の豊かさで測る立場である。さらにセイは「望むものを無償で得られるならば、人は価値のあるものを持たずとも無限に豊かだ」と述べる一方、別の箇所では「富は産物それ自体ではなくその価値にある。価値がなければ富ではない」とも記す（『経済学概論』）

